

⑩実用新案公報

④公告 昭和44年(1969)7月22日

(全2頁)

1

④ガス吸入用マスク

①実 願 昭41-65727
②出 願 昭41(1966)7月13日
③考 案 者 出願人に同じ
④出 願 人 菊野好二
東京都文京区本郷2の22の2二
葉器械株式会社内
代 理 人 弁理士 荒木友之助 外1名

図面の簡単な説明

図はこの考案の一実施例を示し、第1図は正面部よりみた一部切欠斜視図、第2図は背面部よりみた斜視図、第3図は使用状態を示す縦断面図、第4図は同一部切欠斜視図である。

考案の詳細な説明

この考案は手術などにおいて患者に麻酔ガスなどを吸入させる場合に用いるガス吸入用マスクに関するものである。

麻酔ガスを患者に吸わせ、麻酔をかける場合、医学的にみて吸入マスクは顔面に密着していなければならない。例えばマスクが密着していなかった場合において麻酔ガスは当然漏れを生じ、患者の麻酔深度の変化や出血の度合の変化を起す原因となつたり又、そのために患者があばれたり麻酔がかからなかつたりするなど患者に与える影響は極めて大きいものであつた。

ところが、従来一般に用いられていたガス吸入用マスクは、単に楕円形をなし鼻口を覆うだけの構造であつたため、顔面に密着せずガス漏れが生じ易く上記の如き弊害が多々起つていたものであつた。しかして、これらの弊害を起さないためには看護婦などがマスクを押えていなければならず、非常に面倒であつた。そこで、この考案はマスク内を二重構造とし、顔面の大小があつても又顎がない者でもよく密着するようにしたものである。

以下、図面に示す実施の一例によりこの考案を説明する。

2

1は患者aの鼻口部bから顎cまでを覆うことができるマスク本体であつて、ゴム状の弾性体をもつて構成してある。2はマスク本体1の鼻口部bに相当する前面部3に設けたガス送入口であつて、ガスボンベ(図示せず)よりガス管(図示せず)を介して連通する。4はマスク本体1の顔面接触端縁部5を残し、内壁面6に沿つて直交する如く突設した吸盤であつて、マスク本体1と同材にて一体に形成されている。該吸盤4は第4図に示す如く顔面に平面的に接触する。これに対し、マスク本体1の顔面接触端縁部は顎cを除いて堅状に接触するものである。

尚図中、7は紐取付金具、8はマスク本体1を顔面に固定する紐を示す。

以上の如く、この考案は鼻口部に相当する前面部にガス送入口を有し、鼻口部から顎まで覆うことができるマスク本体を設け、該マスク本体の顔面接触端縁部を残し、内壁面に沿つて、これに直交する如く突設した吸盤を設けてなるガス吸入用マスクであり、まずマスク本体1を患者aの鼻口部bから顎cまでを覆うごとく当て、次に取付金具7に取付けた紐8を後頭部に廻してかぶれば、マスク本体1を顔面に固定することができる。しかして、マスク本体1の鼻口部bに相当する前面部3に設けたガス送入口2にガス管(図示せず)を連結してガスボンベからの麻酔ガスを流せばマスク本体1内にガスが収容され患者aにガスを吸入させることができる。この場合マスク本体1の端縁部5と吸盤4とが顔面に二重に接するようになるため、完全に密着するものである。換言すれば本案のマスクは二重構造となつているため、人によつて顔面積の大小があつた場合でも或は老人などのように顎がない者があつた場合でもよく密着するものである。

従つて、麻酔ガスの漏れによつて、患者の麻酔深度の変化などを起す危険は全くなつたし、又看護婦などの手を全く借りることなく、マスクを使用することができるものである。

3

実用新案登録請求の範囲

鼻口部に相当する前面部にガス送入口を有し、
鼻口部から顎までを覆うことができるマスク本体
を設け、該マスク本体の顔面接触端縁部を残し、
内壁面に沿って、これを直交する如く突設した吸

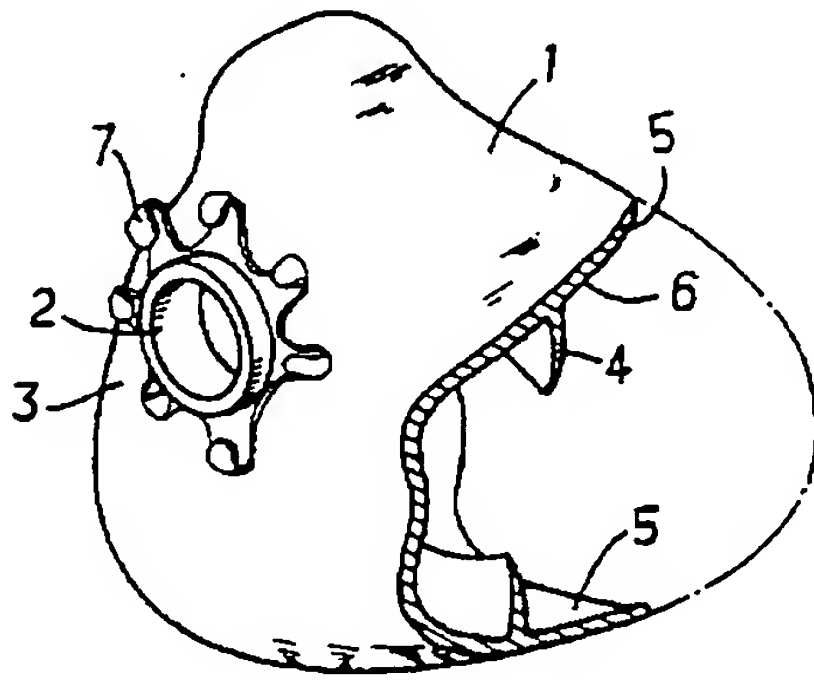
4

盤を設けてなるガス吸入用マスク。

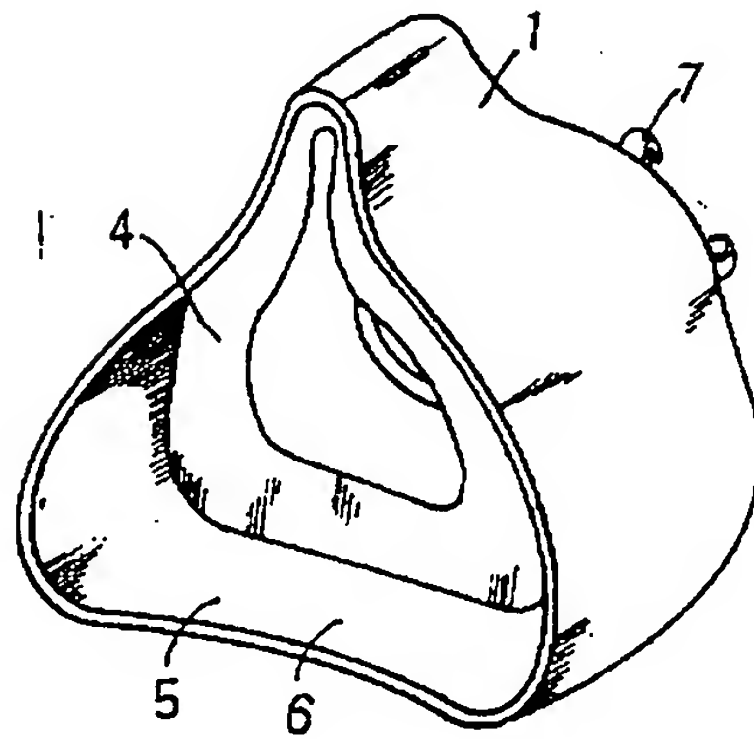
引用文献

5 実 公 昭9-10559

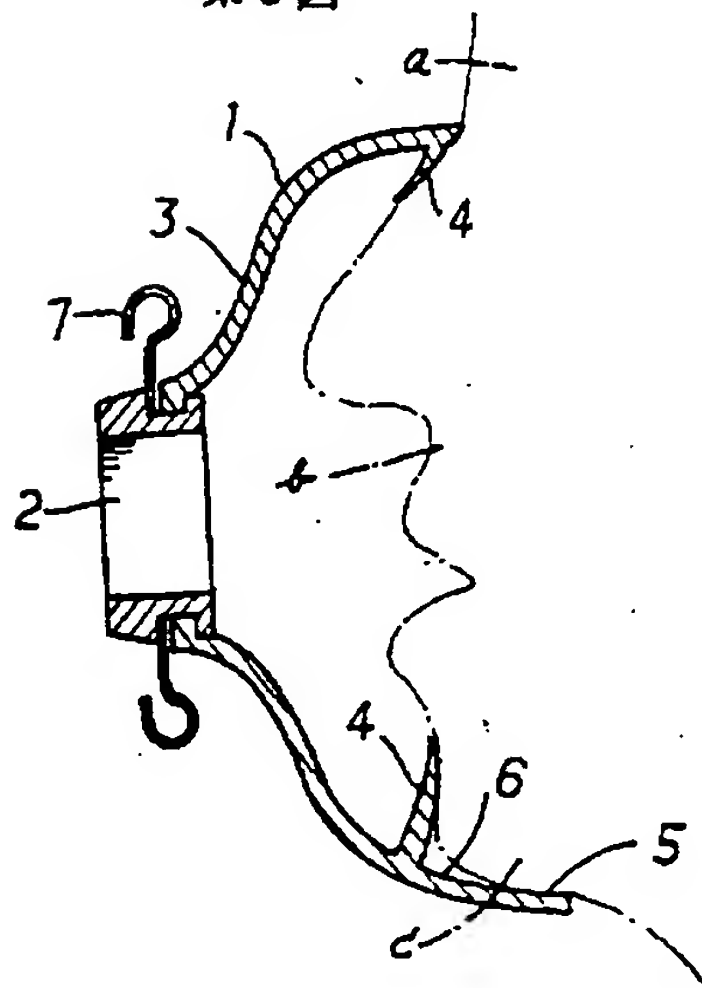
第1図



第2図



第3図



第4図

